

糞分析から見た ツキノワグマ近畿北部西側個体群の食性の特徴

有働真・藤木大介・横山真弓 (兵庫県立大学)

はじめに

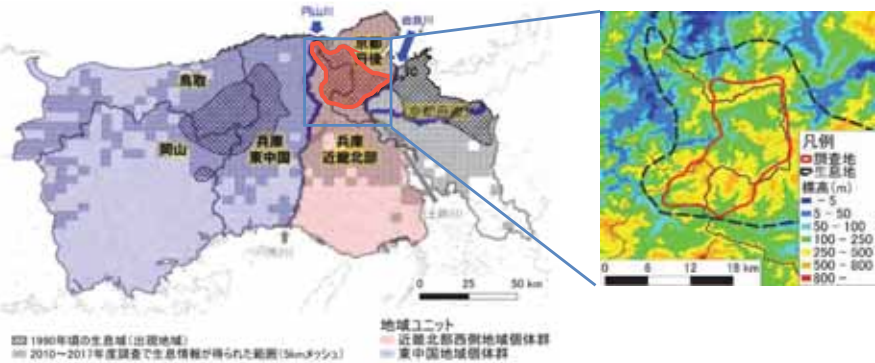


図1. 近畿北部西側個体群の生息地とその標高 (高木ほか, 2022より引用)

ツキノワグマの生息地は
ブナなど落葉広葉樹が優占する山地帯が一般的であるのに対し

近畿北部西側個体群の生息地は
カシ類など常緑広葉樹が優占する低地帯が多くを占めている
また、ニホンジカの高密度化により
下層植生の衰退が指摘されている (藤木ほか, 2014)



図2. 下層植生の衰退状況

1. 生息地が低地帯であること
2. ニホンジカによる下層植生の衰退

による影響を受けた
クマの食性の特徴を明らかにすることを目的とした

調査方法

1. 糞塊収集

同一林道で月4回以上調査を行い、クマ糞を収集
調査期間：2022年5月13日～12月15日、
2023年5月8日～10月16日



図3. 調査地域と糞採取地点

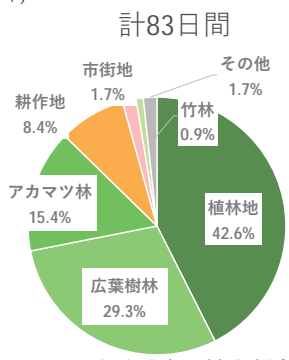


図4. 調査地域内の植生割合

2. 糞分析

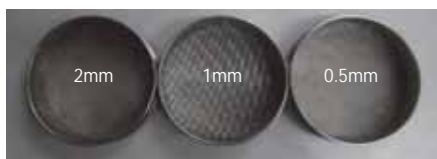


図5. 糞分析に用いたふるい



図6. 糞の水洗いの様子

目の異なるふるいを重ねた上で水洗いを実施し、
食物残渣を可能な限り最小分類群まで同定

各食物の体積率を目視により5段階評価

3. 相対重要度の算出



結果

糞塊の収集状況

表1. 2021年～2023年の糞塊収集結果

年	2021～2023												計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
数	1	21	19	12	36	19	74	40	9			231	

分析結果

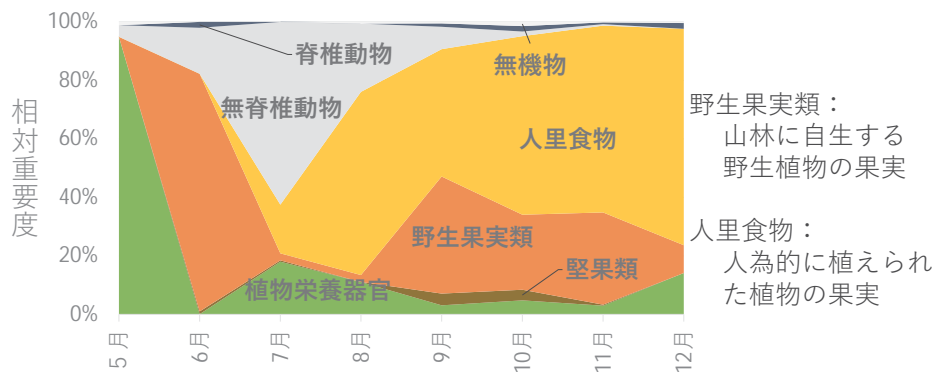


図7. 糞分析結果

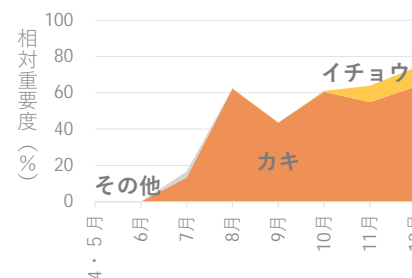


図8a. 栽培果樹内訳

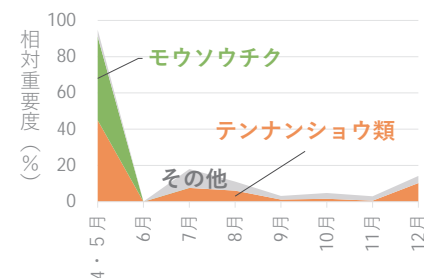


図8b. 植物栄養器官内訳

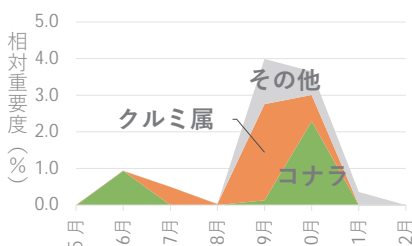


図8c. 堅果類内訳



図8d. 脊椎動物内訳

考察

- カキやモウソウチクの利用率が高い
集落周辺が主な分布地
クマの分布域内に集落やその周辺が含まれており、
利用しやすい可能性
- 堅果類の利用率が低い
嗜好性の高いミズナラ・ブナの分布が少なく、
コナラ・アベマキがおもに優占
これらの堅果の嗜好性が低くあまり利用していない可能性

低地帯

- ササの利用が確認できず
他地域では春季の主要な餌資源 (橋本ほか, 1997)
調査地ではほぼ消失
モウソウチクの利用に移行
- 植物栄養器官の利用率が低い
下層植生の衰退が報告されていない地域と比べ
春季以降、植物栄養器官の利用が非常に少ない
クマが利用できる
植物が衰退している可能性
- シカの利用率が低い
調査地域では2011年頃までシカの生息密度が増加しており
この期間に下層植生が衰退したと考えられる
その後はシカ密度は減少に転じ2022年では2011年の8分の1程度
結果、高い利用率となるほどのシカ密度ではない可能性

下層植生衰退

